

世界保健機関（WHO）の研究組織、国際がん研究機関（IARC）が携帯電話の電磁波に発がん性があるかもしれないと報告しました。携帯電話の電磁波は有害なのでしょうか。

——今回の報告はどのようなものですか。

14か国の専門家31人が、携帯電話の使用と発がんについて各国の研究を精査し、脳腫瘍の発生について「限定的な証拠が認められる」と指摘しました。発がんとの因果関係の強さを示す5段階評価では、上から3番目の2Bです。たはこのように、発がん性が明確になつたわけではなく、あくまで「あるかもしれない」という段階です。確定的な結論が出たわけではありませんが、



IARC は現状の評価について「携帯電話を使えば、がんにかかるということを意味するものではない」としています。同じ2Bには、鉛、クロロホルム、ガソリンエンジンの排ガス、殺虫剤のDDT、電力設備や家電などから出る超低周波などがあります。コーヒーも、膀胱がんの危険性を高める可能性があるとして、2Bになっています。

今回精査した研究の中に

携帯電話の電磁波で発がん?

WHOによる発がんリスクの分類

グループ	発がん性	因子となる主な物質
1	ある	たばこの喫煙、太陽光線、アスベスト、カドミウムなど107種
2A	おそらくある	ディーゼルエンジンの排ガス、PCBなど59種
2B	あるかもしれない	携帯電話の電磁波、コーヒー、ガソリンエンジンの排ガス、超低周波磁界、クロロホルムなど266種
3	あるかどうか分類できない	蛍光灯、原油、水銀、コレステロールなど508種
4	おそらくない	カプロラクタム(ナイロンの原料)1種

電磁波の種類

超低周波	電力設備、家電製品電源、鉄道
中間周波	IH調理器、テレビ、パソコンモニター、鉄道
高周波	テレビ放送、電子レンジ、携帯電話、衛星放送
光	太陽光
放射線	レントゲン



発がん性が必要ですか。——体への影響はほかにも指摘されていますか。過剰な電磁波の影響で、頭痛や不眠、体の痛みなどが起こったと訴える人もいます。

——日本では、携帯の電磁波の健康影響は調査されていますか。総務省の専門委員会などが調査を続けてきましたが、「影響なし」という結果が多く出

は、通話を「1日平均30分、10年以上続けた人」は、脳腫瘍の危険性が40%高まったという報告があります。一方で、発がん性を否定する研究もあります。脳腫瘍が発生するまでは10年、20年とかかるので、影響を見極めるには、さらに長期間の追跡調

北里大学名誉教授の宮田幹夫さんは「精神疾患や思い込みで電磁波の害を訴える人もいますが、携帯や家電の電磁波でアレルギー反応を起こす人は確かに存在します。患者の訴えを気のせいと決めつけてはならない」と指摘しています。

「可能性はある」長期に追跡

になっています。今回の報告について、同省電波環境課は「現時点では問題がない」としています。

——携帯電話をどのように使ったらよいですか。携帯電話はいまや毎日の生活や仕事に欠かせません。無理に使用をやめたり、神経質

になつてストレスをためたりするのはよくないことです。ただ、「あるかもしれない」という現状では、予防的観点から、通話を短くしたり、通話の際にイヤホンマイクを使つたりすると安心ですね。

また、元京都大学工学部講師の荻野晃也さんは「欧州の多くの国では、子どもの携帯使用に注意を促す勧告が出ている。日本も見習うべきだ」と指摘しています。

大人に比べて水分が多い子どもは脳は電磁波が浸透しやすい、影響があるとすればより大きいとみられるからです。

携帯電話の通話時、側頭部に吸収される電磁波のエネルギー量は、SAR(比吸収率)という単位で示され、機種により異なります。販売されているものはどれも国の基準以下ですが、携帯電話会社のホームページで値を確認できます。気になる人は機種選びの参考にするとよいでしょう。

(佐藤光展)